

AIDS UPDATE

No.55 2005.6.14

広島大学病院
エイズ医療対策室

内線5581 (輸血部長室)

Internet: www.aids-chushi.or.jp

7th ICAAP 2005.7.1~7.5

■ いよいよ第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議 (7th ICAAP)の開催が迫ってきました。2005年7月1日(金)~5日(火)の5日間、神戸国際会議場、神戸国際展示場、ポートピアホテルで開催されます。

■ プログラムは多様な発表形式で構成されています。プレナリーセッション・シンポジウム(招待講演)、5つのトラックからなる一般演題、スキルズ・ビルディング・ワークショップ、文化プログラムのほかに、NGOや国際機関の活動を紹介するエキシビションも開催されます。詳しいプログラムについては、こちらをご覧ください。

<http://www.icaap7.jp/jpn/>

■ 日本で国際学会が開催されるこの2005年は、HIV/AIDSに関する世界的な取組みにおいて、二つの重要な意味があります。第一に、2001年の国連エイズ特別総会の政治宣言(Declaration of Commitment of the UN General Assembly Special Session on HIV/AIDS)によって、各国が自らの国家目標に沿って実施した対策の成果を報告することが求められている年であること。そして第二に、2005年はWHO(世界保健機関)/UNAIDS(国連合同エイズ計画)が進めている「3 by 5 イニシアティブ」(2005年までに途上国の300万人に治療を普及する計画)の成果が初めて評価される年にあたります。

■ 会議全体の公用語は英語ですが、開・閉会式、プレナリーセッション、シンポジウムの一部は日本語の通訳が付きまします。各国からの発表や報告を、日本国内で聞くことができる貴重な機会です。ぜひご参加ください。

歯科医療機関における HIV感染者等の診療体制について

■ いまだに診療科によっては、HIV感染症患者の診察拒否が残っています。このたび、『歯科医療機関におけるHIV感染者等の診療体制について』の科研調査より、歯科診療拒否についての報告があげられたことをうけて、厚労省よりHIV感染症についての正しい理解、適切な感染防止の徹底をうながす通達が出されました。

■ 患者さんが安心して診療を受けられる歯科施設の体制づくりには、まず、医療従事者が正しい知識・情報を得ることが大切です。歯科領域の感染予防マニュアル、治療マニュアルは、次のサイトから入手が可能です。

- ・『歯科診療における院内感染予防ガイドライン』
- ・『HIV感染症の歯科治療マニュアル』

http://api-net.jfap.or.jp/siryousiryousiryou_Frame.htm



～エイズ医療対策室だより～
カウンセリングの現場から

【前半】

こんにちは。始めまして。私は、エイズ医療対策室で働いている臨床心理士の喜花伸子と申します。2000年の4月から、HIV感染の患者さんとその家族やパートナーの方たちの心理的サポートに携わっています。



ところで、皆さんはもし自分がHIVに感染していると告げられたら、誰に相談しますか？

妻？夫？恋人？

親？兄弟？

友人？職場の人？

それとも誰にも言わないでしょうか。

実際、身近な人に感染したことを告白し、支えてもらうことができている患者さんも多くおられます。また、誰にも伝えないと決意されている患者さんもいます。

そして、性的パートナー(妻・夫・恋人など)に伝えなければと思いつつ、伝える勇気がなくて悩んでおられる患者さんもいます。

身近な人に感染の事実を伝えることのメリット、デメリットは何でしょうか。患者さんはなぜ伝えることをためらうのでしょうか。また、どんな時に伝えようと決意されるのでしょうか。

特に性的パートナーへの感染告知は、セーファーセッ

クス(コンドームを使うことで相手への感染を防ぐ)を行いやすくするためにも重要です。そのことは、感染した患者さん自身も十分に理解されているのです。それでも伝えることをためらってしまう患者さんは、相手からの拒絶を恐れている場合が多いようです。

「伝えたら家庭が壊れると思って怖い。」

「相手が去っていってしまうかもしれない。失いたくない」

このようなことを言われる患者さんにどう対応していくことが患者さんやパートナーの利益になるのでしょうか。

大まかに分けると3つの方法があると考えられます。

- ① 性的パートナーに伝えることの重要性を説明し、説得する。
- ② 本人が伝える気持ちになるまで、時間がかかっても待つ。
- ③ パートナーへの伝え方、伝える時期、伝えた後のパートナーへの心理的サポートなど、伝える際の配慮の仕方について具体的に話し合っていく。

実際は個々のケースで異なりますが、時期に応じてこの3つの方法全てを使って対応していくことが多いと言えます。

今回は、パートナー告知という課題に向き合う患者さんをどのようにサポートしていくか、模擬事例をもとに考えていこうと思います。 [KIHANA]

＜ご意見募集＞

「AIDS UPDATE」は今後も不定期に発行します。ご意見やご希望がありましたら輸血部(5581)までお寄せ下さい。

[TAKATA, OE]

nobotaka@hiroshima-u.ac.jp